



## 山城知佳子さんが「西日本文化賞」を受賞しました！

1940年よりはじまった、西日本新聞社が九州・沖縄地域を舞台に文化、芸術、学術などの分野で顕著な業績を上げた個人や団体を顕彰する「西日本文化賞」。第82回となる今年、あじびの所蔵作家でもある山城知佳子さん(東京藝術大学准教授)が若手・中堅を対象とした奨励賞(社会文化部門)を受賞しました！沖縄出身の山城さんは、沖縄の歴史や現実を鋭く捉え、土地や人々の記憶を想起させる映像やインスタレーション作品を制作し、国内外で発表しています。あじびでは映像作品1点を所蔵・展示するほか、「アジアをつなぐー境界を生きる女たち」展(2012年)への参加など、深い縁がある作家です。この度の受賞、心よりお祝い申し上げます。



◀11月3日に行われた授賞式の様子  
提供：西日本新聞文化財団



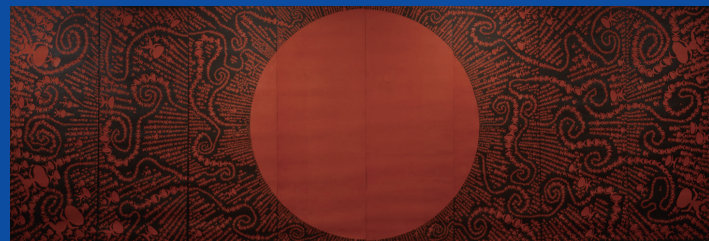
《あなたの声は私の喉を通った》2009年 当館所蔵  
Your voice came out through my throat, 2009, Collection: Fukuoka Asian Art Museum

山城さんは中面記事にも登場！ →

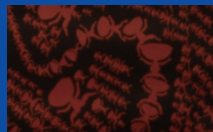
## コレクション展 切り絵の魔術師 — 呂勝中

リユ・シヨンジョン

大きな太陽のように見えませんか？円の周りに配されている無数の物体は、よく見るとすべて人型の切り絵で表現されています。作者である呂勝中は、中国民俗芸術(とりわけ切り紙や年画)を創作の源泉に、1980年代後半からスケールの大きな作品を生み出してきた中国を代表する美術家でしたが、昨年2022年10月に逝去されました。本展は呂氏を追悼するとともに、所蔵作品を通してその功績を振り返ります。



《○》1991年 当館所蔵  
○, 1991, Collection: Fukuoka Asian Art Museum



🔍 拡大(部分)

会期：2024/1/2(火) - 4/9(火)

会場：7階アジアギャラリー

## ドクペルー映像ワークショップ作品が 東京ドキュメンタリー映画祭2023にて公式上映

昨年度のあじびレジデンスIII期で開催されたドクペルー(ペルー)による映像ワークショップ。そこで制作された一般参加者の作品が、東京ドキュメンタリー映画祭2023の長編+短編部門で公式上映されることが決まりました。上映されるのは、チームB制作の《KUMU 日々を組む》です。チームBのみなさん、おめでとうございます。



《KUMU 日々を組む》(2023年、23分、監督：児玉公広、田村さえ)  
福岡市にある活版印刷会社「文林堂」を経営する山田善之さんの姿を見つめながら記憶を辿るドキュメンタリー

上映日：12/13(水)10:00、18(月)12:00

会場：新宿K's cinema(東京都新宿区)



# AJIBI NEWS

約5,000点から選りすぐった10名24点の作品

# これぞあじびの蓄積、 これぞアジアの現代美術を体感！

## Fukuoka Asian Art Museum—Best Collection

福岡のまちをアートで彩る「FaN Week」のオープニングとともに9月に開幕した本展。もうご覧になりましたか？1999年の開館以前から蓄積してきた、あじびのアジア近現代美術のコレクション約5,000点からの選りすぐりだけあって、ダイナミックな作品、インパクトある作品など、どの作品も見応え十分！往年のあじびファンからも、初めて当館を訪れた方々からも大好評を得ています。今号では、本展出品作から1作品をピックアップしてご紹介いたします。選出者は、当館のコレクション作家でもある現代美術作家の山城知佳子さんです。

## 山城知佳子さんによる、私の推し作品

### 11年を経て得た自身の変化と気づき

私も参加した「アジアをつなぐ一境界を生きる女たち」展(2012年)で初めて見ました。作品は変わらないのに、11年前わからなかったことが今は一瞬で感じられるようになったようで、自分自身の変化に驚きます。沖縄ではここまで自分の身体をさらけ出した表現をする現代美術作家は滅多にいません。それはまだ女性に対する抑圧が強く、それゆえに抑圧への認知さえもしづらい構造があるからかもしれません。私も最近そうした女性として受ける抑圧について深く考えていたところだったので、この作品がもつ、声をあげる力強さに引き込まれます。当然痛みも感じる作品ですが、個々の糸や球の広がり「女性はこうあるべき」という抑圧を解き放っているようにも、また、他者とつながり信頼や対話で結ばれる関係性のようにも見えます。

### コレクション展についての感想も

展覧会全体を観て感じたのは、やはり痛みです。歴史や社会の問題を受け止め、身体的に痛みを感じているような作品が多い。ですが、同時にどの作品も声を発する強さを持ち合わせています。たとえ自分の代で世の中を変えることができなくても、「精神の自由は奪われない」と生きる、まさに「生の強さ」を感じる作品が多いという印象を持ちました。

### 山城知佳子(やましろちかこ)

1976年沖縄県生まれ。出身地の沖縄を舞台に映像や写真を制作し、国内外で活躍する現代美術作家。2019年より東京藝術大学先端芸術学科准教授。2023年個展「山城知佳子 ベラウの花」(丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、香川)、Tokyo Contemporary Art Award 2020-2022受賞など。

写真：鷹野隆大

## リン・ティエンミャオ[林天苗](中国)《卵 #3》2001年



リン・ティエンミャオ[林天苗](中国)《卵 #3》2001年(部分)  
Lin Tianmiao (China) *Spawn #3*, 2001 (detail)



# 世界遺産 THE GREAT SILK ROAD 大シルクロード展 WORLD HERITAGE EXHIBITION

東洋と西洋を結ぶシルクロードに関心が向けられるようになったのは、19世紀後半以降です。とくに日本では、中国と友好が結ばれて以降の1980年代に、テレビ番組や音楽で異国情趣漂うシルクロードが紹介され、多くの人を魅了しました。そして2014年にユネスコの世界遺産に認定されると、シルクロードへの関心はさらに高まり、これまでにない勢いで学術調査や研究が進められ、新しい発見が続いています。本展は、世界遺産認定後に中国国外で初めて行われる大規模なシルクロードの展覧会です。中国国内27カ所の主要博物館や研究所から約200点もの文物や関連資料が出品され、その中には日本の国宝に相当する一級文物45点も含まれます。これほどの展示ゆえ、すべてをじっくり鑑賞するには1日かけても時間が足りないかもしれません。そこで、ひと足お先に東京展を見てきた本展担当のラワンチャイクン学芸員に「必見の逸品」を教えてくださいました。ぜひ、お見逃しなく！

一級文物45点を含む、  
シルクロードの遺宝200点  
が、あじびに集結！



一級文物

《六花形脚付杯》8世紀(唐時代) 山西博物院所蔵  
Gold Goblet with Six Petals Design, 8th Century, Shanxi Museum

内側にも見所あり！

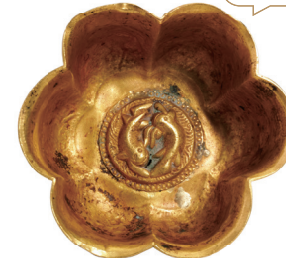


双魚

可憐な花びらの杯に注いだものは葡萄酒でしょうか？中には双魚が泳いでいます。周りは狩猟の模様で飾られ、魚々子(ななこ)と呼ばれる丸い粒で埋められています。ペルシア(古代のイラン)発祥の魚々子の技法は奈良時代の日本にも伝わりました。



魚々子



一級文物

泣く子もだまる迫力

### 《馬頭観音坐像》

8世紀(唐時代) 西安碑林博物館所蔵  
Seated Hayagriva, 8th Century, Xi'an Beilin Museum  
目を吊り上げて牙をむき出しにした顔は、慈悲深い姿の観音菩薩の中でも馬頭観音だけです。それは、諸悪に怒り、睨みをきかせて衆生を守るための表情ですが、その怖さは泣く子もだまる迫力です。



一級文物

躍動感たっぷり！

### 《獅子狩文絹布》

7世紀末-8世紀初(唐時代) 新疆ウイグル自治区博物館所蔵  
Silk Cloth with Lion Hunt Design, End 7th - Early 8th Century, Xinjiang Regional Museum  
振り向きざまに、おどろかされる獅子に矢を放つ男。疾駆する馬のまわりでは、犬が兎を追い、男が飼っているであろう鷹が飛び交います。砂漠の正倉院といわれるトルファンのアスターナ古墳出土。



唐花

鮮やかな装飾にうっとり

### 一級文物 《童子図(困窘仕女図屏風 部分)》

8世紀(唐時代) 新疆ウイグル自治区博物館所蔵  
Children (details), 8th Century, Xinjiang Regional Museum

ほくらも会場にいるよ。探してね！



Honoring 45 Years of Peace and Amity between Japan and China THE GREAT SILK ROAD WORLD HERITAGE EXHIBITION

## 日中平和友好条約45周年 世界遺産 大シルクロード展

2024/1/2(火) - 3/24(日) | 7階企画ギャラリー | 一般1,600円、高大生1,000円、小中生600円

観覧時間：9:30 - 18:00 (入場は17:30まで) ※本展の半券で7階アジアギャラリー「福岡アジア美術館 ベストコレクション」の展示もご覧いただけます。

Fukuoka Asian Art Museum 25th Anniversary Special Exhibition Fukuoka Asian Art Museum—Best Collection

福岡アジア美術館開館25周年スペシャル企画 福岡アジア美術館 ベストコレクション

9/14(木) - 2024/4/9(火) | 7階アジアギャラリー | 一般200円、高大生150円、中学生以下無料

# アーティストがいて、創造的なコミュニティが生まれる

あじびにとって、レジデンスとは何なのか？ 当館でアーティスト・イン・レジデンス事業を担当する中尾学芸員が、今年度第1期のレジデンスを振り返りながらたっぷり語ります。

「日本の人や街並みの規則正しさや、路上に捨てられたタバコの吸い殻が、とても気になっている」とは、現在のレジデンス・プログラム(第II期)に参加している**チェン・ウェイチェン**の言葉だ。彼女らしい視点だが、そうした小さな違和感や思いつきがどこまで膨らむのかはわからない。その不確実なプロセスそのものが可能性でしかない、とも言える。このレジデンス・プログラムについて、第1期を振り返りながら、少し書いてみたいと思う。

数年前に福岡市に引っ越してきた**山本聖子**は、北九州市にある旧八幡製鉄所(日本製鉄九州製鉄所)のことが気になって気になって仕方がなかった。鉄という素材への熱い思いを製鉄所での撮影に一点集中させ、**自らの生い立ちや近代化された日本社会の矛盾**に重ね合わせた。鉄を人間のように生まれて死ぬものとして展開させたインスタレーションも見応えがあった。彼女の作品は、ふつうでは許可されない製鉄所での撮影に尽力いただいた方々や、少数精鋭の制作スタッフとの関係性がなければ、実現することはなかっただろう。

それは**清水美帆**も同じだった。ベトナムでのレジデンス以降、自らのオリジナルの凧を作ろうとしていた清水のリサーチは、福岡にとどまらず、戸畑、壱岐、長崎、そして海を越えて釜山にまで達しようとしていた。そうして**さまざまな人や凧に出会い、関係性の糸を伸ばしつづけた**のだった。清水の考案した二つの目の赤い凧は、愛宕浜での凧あげ大会の日に、凧名人たちの助けをかりて空高く舞い上がった。彼女のレジデンスと作品にとって、もっともふさわしい舞台は美術館での展覧会ではなく、この凧あげ大会だったのかもしれない。

オランダからやってきた**チェ+シャイン・アーキテクト**は、山本・清水より短い2カ月間の滞在だった。しかし滞在制作のプランは、歴代のレジデンス作家のなかでももっとも大掛かりで、これを何とかやり遂げられたのは《The Power of One》という作品名の通り、共同制作に参加した100人以上のサポーターやプロフェッショナルな制作チームの一人ひとりの力に他ならなかった。共同制作の1日目から、これはあつひとつの**「コミュニティ」を作るプロセスなのだ**と痛感した。

3組のアーティストたちの制作方法はそれぞれ違っていたが、振り返ってみるとそれは人と人との関係性をつなぎ、成長させながら、創造的なコミュニティを作ることをベースにしていた。それが山本聖子のように少数精鋭のこともあれば、チェ+シャインのように大規模な場合もあるが、その中心にはアーティストがいて、さまざまな人がそこに集った。お互いのことをまったく知らない人もたくさんいた。**アーティストの思いもよらない作品へのアイデアと熱量がなければ、こんな形で集まり、ひとつの創造的プロセスを共有することはなかったに違いない。**

福岡アジア美術館の開館記念展のカタログには、巻頭に「コミュニケーション/コミュニティ/コラボレーション」という文章が掲載されている。そこには「アートが観衆によって眺められ、鑑賞される対象から、ひとびとが体験し、参加し、協力するような性質のものに変わってきた」ことや、「職人やふつうの人々の創造力を『美術』という場、アートという土俵に乗せることもまたアーティストの重要な役割」であることが記されている。それはこのときの展覧会のみならず、それまでの美術館や

美術の枠を拡張しようとした**福岡アジア美術館の目指すべきひとつの指針**でもあった。

1999年の開館以来、アジアを中心に100人を超すアーティストや研究者のレジデンス・プログラムを実施してきたが、そこでは大なり小なりコミュニティが一時的に形成され、価値観の異なる多様な思いが交わり合ってきた。そこに関わった人々を突き動かしたのは、作品にかけるアーティストの一途さや屈託なくよここぶ顔だったが、それと同じくらい重要だったのは、**お互いにクリティカルな視点を持ち、ぶつ合い、受け止められるような信頼関係と、みんながそこに集える居心地のよさ**だった。

素晴らしい時間を共有させてもらったアーティストと協力者の皆さんには感謝しかないが、**こうした共振的なプロセスとコミュニティの実現こそ、レジデンス・プログラムに期待される交流のひとつの形ではないか**と思う。

学芸員 中尾智路

期アーティスト「7月〜9月」



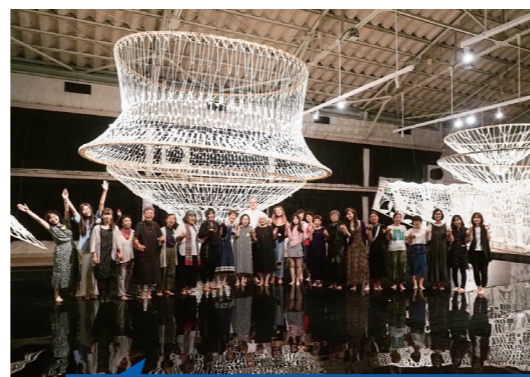
《The Power of One 明鏡止水》2023年 The Power of One 2023 ★

## Part 1 [July - September] 大反響! あじび史上最大の作品が完成

アムステルダム(オランダ)  
**ジン・チェ&トーマス・シャイン**  
(チェ+シャイン・アーキテクト)  
Amsterdam, Netherlands  
Jin Choi & Thomas Shine [Choi + Shine Architects]



旧体育館での制作風景。骨組みの微妙なバランスを調整するシャインさん



一緒に作品を作ったサポーターたちと完成記念写真。みなさん大満足の表情です

## ついに叶った巨大製鉄所での撮影

福岡  
**山本聖子**  
Fukuoka  
Yamamoto Seiko



《白色の塵、赤い血》2023年 Whiteash, Bleeding Red 2023 ★



山本さんの熱烈なアプローチによって、北九州八幡にある九州製鉄所での撮影が叶いました



解体現場でも展示素材をゲット

## Yamamoto Seiko

## 人、凧、伸ばしつづけた関係性の糸

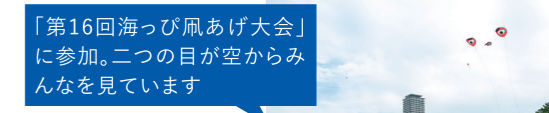
東京  
**清水美帆**  
Tokyo  
Shimizu Miho



《空の目》2023年 Eyes of the Sky 2023 ★



九州各地でのリサーチをもとに、インパクトのあるオリジナルの凧を制作



「第16回海っぴ凧あげ大会」に参加。二つの目が空からみんなを見ている

10月1日 福岡市海浜公園(愛宕浜)で開催 ★

## Jin Choi & Thomas Shine

## Shimizu Miho

★写真 川崎一徳

Part 2  
[October – December]

今回のレジデンスは、チェンさんにとって初めてのレジデンス経験となります。「台湾で先輩たちが国際的に活躍する姿をみて、私も台湾以外での活動や交流にチャレンジしたくなったんです。選ばれたときはとても嬉しく、夢じゃないかと思ったほどです」と笑顔を見せます。「平面から三次元を理解する」「物質の文化観」「デジタルツール」「日常の中の不思議」という4つのコンセプトをベースに制作しているチェンさん。福岡では路上観察から着想を得て、彫刻、インスタレーション、スケッチなどで表現していく予定です。滞在前半のほとんどの時間は街に飛び出し、徒歩と自転車で巡り、時に細い路地に入り込んだりしながら、日々、路上を観察しては新しい発見をしてきました。「道端に置かれたコンクリートブロックの穴にタバコの吸い殻がギュッと詰められているのを見つけたときは驚きました。日本はとても清潔な国とっていましたから。でも、逆に人間らしさを感じて、より好感をもちました。また、住宅の庭先をいろいろ見てうちに台湾と日本の国民性の違いにも気づきました。成果展では、私が路上で発見した奇妙なものや台湾と日本との違いを取り入れた作品をいろいろ発表したいと思います」。チェンさんの目に福岡（日本）がどのように映り、それがどう表現されていくのか。楽しみがふくらみます。

# Chen Wei-Chen

街にあふれるインスタレーションの種



チェンさんが路上観察で撮影した記録写真より



チェンさんが気がなったというタバコの吸い殻



過去作品《Light, Square Wall, Digital Tree, Empty Can》2020年  
Photo by Anpis Wang

期アーティスト「10月〜12月」



新台北(台湾)  
**チェン・ウェイチェン**  
[陳為榛]  
New Taipei City, Taiwan  
Chen Wei-Chen

鍾乳洞のように有機的なかたちをした立体物。セメントの粉を吹きかけて制作する彫刻は、長い間、古賀さんの代表的な作品でした。「以前はセメントがもつ固くて頑丈なイメージを真逆に表したいと、つまりセメントをあくまで素材として見ていました。ですがここ数年、祖父母から昔の話を聞くうちに作品の文脈が、別の方向へと開かれたんです」と古賀さん。今回のレジデンスでは、久留米でセメント会社を開業した祖父母から聞いた話をもとに作品を制作しています。「祖父母から聞いた家族の歴史や土地の歴史、そこからもう少し掘り下げた物語を作品化していきたい。家族の話は個人的なものではありますが、社会と密接に関わるものでもあります。そして祖父母から聞いた久留米の歴史は、僕が初めて耳にするものでした。いずれも今の時代の中で共有する問題が多く含まれている気がして、そういった要素を入れて構成しよう



福岡  
**古賀義浩**  
Fukuoka  
Koga Yoshihiro



3Dペンを使って文章を立体化

と思っています」。物語をどう視覚化するのか…との質問に対して「彫刻にこだわりたい」という古賀さん。プランとして3Dペンで立体化させた文章と、セメント彫刻を展示して物語を表現していきたいと話します。自身の作品が新たに開かれたことにより「もっと他者にも開いた状況にもってきたい」と、今回ワークショップも実施し、多くの参加者に「自分以外の誰かが見た夢」を3Dペンで綴ってもらいました。成果展では、この夢の集合体も展示されます。



ワークショップで参加者たちが書いた夢の物語



過去作品《family tree》2019年

## 祖父母から聞いた家族の話、土地の歴史 Koga Yoshihiro

II期アーティストによる — 第20回アーティスト・イン・レジデンスの成果展

会期：12/9(土) – 17(日) 観覧無料

会場：Artist Cafe Fukuoka(11:00~17:00、月曜休)、福岡アジア美術館(予定)

成果展の詳細はコチラ

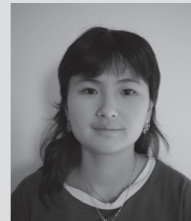


Artist Cafe Fukuokaの  
詳細はコチラ



Part 3  
[January – March, 2024]

期アーティスト「2024年1月〜3月」



ロンドン(イギリス)／北京(中国)  
**チュー・メイタオ**  
[曲美陶]  
London, England/Beijing, China  
Meitao Qu

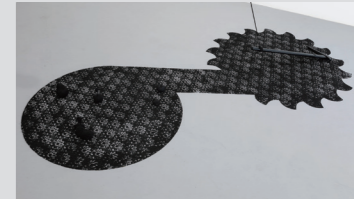


《Enter the Fortress: Play well, Eat well, Sleep well》2021年

彫刻、インスタレーション、デジタル・メディアなどを横断して制作するアーティスト。これまではミニチュア玩具や建築模型を用いて、「進歩」の象徴である都市の視覚的生態系を表現してきました。遊び心のある表現も特徴的です。福岡ではリサーチの対象を東アジアの大衆文化、アーバンイズム、ナショナル・アイデンティティの関係性にまで広げて、新しい表現を模索していきます。



ハンブルク(ドイツ)／東京／福岡  
**川辺ナホ**  
Hamburg, Germany/Tokyo/Fukuoka  
Naho Kawabe

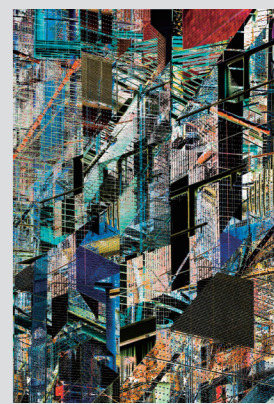


《ふたつのワルツを踊り回転する刈り機》2022年  
Double waltzing rolling shearer, 2022

映像、インスタレーション、立体、ドローイングなどを組み合わせて制作するアーティスト。主に「炭」というマテリアルを歴史的、社会文化的にリサーチし、個人の体験と重ね合わせながら現在の社会構造を捉え直すとしてきました。今回のレジデンスでは、福岡の人々の生活、産業、都市のインフラと密接に関わった石炭から、未来の素材として期待されるカーボンまでをリサーチしていく予定です。



福岡  
**花田智浩**  
Fukuoka  
Tomohiro Hanada



《Abstract Photograph》2022年

写真をツールとして、目に見えるものの中にある見えないものを映し出し、再構築することに取り組むビジュアルアーティスト。そうして日常生活のルーティンによって引き起こされる思考の停止に疑問を投げかけてきました。今回のレジデンスでは、芸術大学や福岡の人々とともに新しい福岡の都市風景を制作予定。このほかカラーージュ作品や製本制作ワークショップを計画しています。

2024年度 福岡アジア美術館 アーティスト・イン・レジデンス  
参加アーティスト募集！

2024(令和6)年度のレジデンス事業に参加するアーティストを公募します。Artist Cafe Fukuokaスタジオを拠点に創作活動や作品発表、いろいろな人々と交流できるまたとないチャンスをお見逃しなく。

最新情報はコチラ



ただいま滞在中！

Meitao Qu Naho Kawabe Tomohiro Hanada